

# ライマンの音声・音韻研究

ティモシー・J・バンス

Timothy J. Vance

国立国語研究所

ライマン (Benjamin Smith Lyman [1835~1920]) は、言語学ではなく、地質学と鉱山学の専門家であった。1873年に明治政府の申し出を受け、いわゆる「御雇外国人」として来日し、8年間の滞在で日本語がかなり上達したらしい。1894年に出版された論文 (“The Change from Surd to Sonant in Japanese Compounds” [日本語の複合語における無声音が有声音に変わる現象]) において「ライマンの法則」等を提案した結果、後年に言語学界で有名になったが、1878年に “Notes on Japanese Grammar” [日本語文法概要] という題名が付いた論文が横浜で発行されていた英字新聞 *Japan Weekly Mail* に連載された。題名と異なり、文法ではなく、発音やローマ字化に関する論文で、当時の音声学の水準を考えれば、ライマンの解説には意外と進んだ箇所もある。本発表では、ライマンの音声・音韻分析を現代言語学の観点から考察する。

母語の英語の他に、ライマンはフランス語とドイツ語も達者で、中国語やヒンディー語を含めて数多くの言語に関する知識も豊富であった。この言語履歴は日本語の記述に役立ったが、一方では、国際音声記号がまだ定まられていない時期であったため、ライマンの説明が行き止まりになったこともある。(因に、国際音声学協会が創立されたのは1888年。) 音素という概念がまだ未知のものであったことも妨げとなった。物理的に異なった複数の音 (異音) が心理的に同一の音 (音素) を具現するというような分析は20世紀の発想である。

ライマンの母音の記述が特に解釈しにくい。他の言語の母音を試金石として挙げ、日本語の母音と比較するしかなかったが、母音が時空間にどれほど変異するかは理解していなかったようである。その上、マサチューセッツ州西部で生まれ育ったライマンの母語方言の母音体系を推測するだけでも困難な問題である。

子音の場合は、ライマンの音声記述は比較的分かりやすいが、「同じ音」(音素) が環境にかかわらず同じように発音されるはずであるという先入観が働き、記述が歪んだこともある。例えば、「ふ」の子音が [ɸ] ではないとライマンは主張した。また、母語の音素範疇が邪魔になり、日本語において [ts] が (音韻的には) 一つの子音になっている可能性には気づかなかったらしい。日本語の撥音のような極端な例になると、「電波」の [m:]、「電灯」の [n:]、そして「電化」の [ŋ:] が日本語母語話者にとって全部「同じ音」(音素) であるとはとても想像できなかったに違いない。